

道徳教育における掲示資料の制作とその効果

佐藤 尚宏

Painting for poster materials and its effects used in moral classes

Takahiro SATO

Abstract

本稿は道徳教育において絵画を用いた掲示資料により内容理解の援助を目指した授業について、主に絵画制作の面から報告する。

This paper reports mainly on aspects of painting to support content understanding by posted materials in moral education.

Key words : Moral education, posted materials, painting

キーワード : 道徳教育, 掲示資料, 絵画

1. 研究の目的

(1) 道徳の授業における物語理解の課題

今回の実践は、本学の川上はるえ氏の高梁市立東中学校での「二人の弟子」を題材とした道徳の授業において物語の理解に十分な時間が掛けられないため、援助に使用する紙芝居のような掲示資料を制作してほしいという依頼が発端だった。

50分の授業の構成は以下の通りである。

- ・導入：導入の発問（5分）
- ・資料の理解（10分）
- ・展開：中心となる発問（25分）
- ・終末：文章にまとめる（10分）

資料の理解には10分しか掛けられず、丁寧に音読をし

て理解するには時間が足りない。もし紙芝居のように語れば、短時間での物語理解を促せるという意図だった。

全てのシーンは無理でも、物語の重要なシーンを絵に表す事で、物語の概略や登場人物の状況の理解を援助する掲示資料を制作する事になった。

(2) 掲示資料に期待される役割

道徳の目標は「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」註¹⁾において 第2章 第2節 道徳化の目標で「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため」とされている。(p. 8)

この目標とされる「道徳性」は「道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性」(p. 6)であるとされている。

題材の物語の登場人物を自分に置き換えて「自分ならどうするのか?」と向き合い、自分なりの行動や姿勢を考える事で学習が成立する。その前提を整えるのが今回の掲示資料の役割である。題材となる物語の流れや登場人物の行動など、単純に割り切れない様々な状況をビジュアルで示すことで、文章だけでは不可能な直感的で短時間の理解を援助するための掲示資料の制作である。

2. 実践報告

(1) 題材「二人の弟子」の概要

題材とする「二人の弟子」はB5で5ページ程の短編である。あらすじは以下の通りである。

上人のもとで励まし合いながら共に修行に臨む道心と智行だったが、恋に落ちた道心は智行の引き留めを無視し寺から逃げ出してしまう。智行は自らの修行に専心し立派な僧侶となって故郷に戻る。そこへ突然「もう一度修行をやり直したい」と道心が表れた。自分自身の愚かさや弱さを引き受けやり直そうとする道心とそれを受け入れ許しを与えた上人に、どうしても納得できず怒りさえ覚える智行。

「人は皆、自分自身と向き合って生きていかねばならないのだ」という上人の言葉を受け取った智行は、月の光に照らされた一輪の白百合の純白の白さに心が圧倒され、涙がとめどなくあふれ、いつまでも立ち尽くした。

この物語で描かれる道心と智行の過去は対称的だが、どちらも自分自身の心の愚かさや弱さ、偏狭さや不寛容に気付き、それを乗り越えてなお生きていこうとする姿勢は共通している。道心は「よりよい生き方をめざす」ため修行を再開したいと願い、智行は「人間として本来的な在り方（上人の姿）」になれない自分自身を見つめる。この二人の姿は道徳性を示すモデルとなる。

(2) 物語理解の援助としての工夫

主人公である智行のシーンを中心に、展開のキーとなる4つの場面を選び絵に表した。

描画材は絵の具に比べ短時間で制作でき、柔らかい表現と色彩の変化を作り易いパステルとした。

サイズは教室の後ろから見てもよくわかるようにA1(594×841mm)とかなり大きな作品とした。

背景には登場人物の心情や状況を、色と形により表現するよう留意した。

以下、4つの場面の作品を示す。

1) 道心の懺悔と願いのシーン



道心の過去と落ちぶれた姿で転落した人生を表した。

全体の構成を「道心を上から見下ろす智行」とし、道心への侮蔑や蔑みを表した。

2) 上人の許しと智行の驚き



上人が道心の手を取り許しを与えるシーンでは二人の表情は抑えめにして見る人に想像の余地を残した。

二人を背景に、許されるはずがないと思いついてきた智行の驚きや戸惑いを表現した。

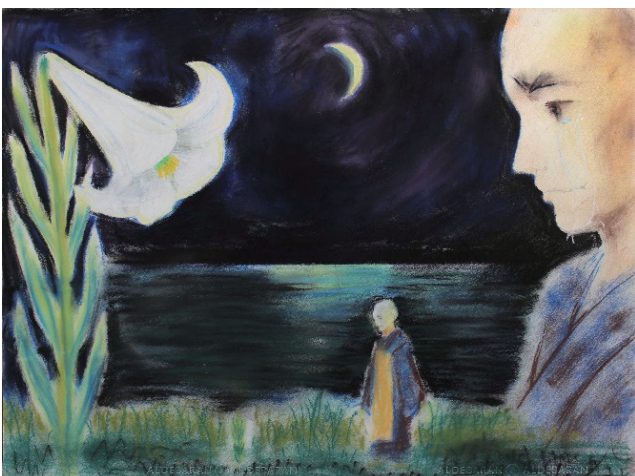
3) 納得できない怒りと苦しみ



上人がなぜ許したのか、道心がなぜ許されたのか、どうしてもわからない智行の激しい感情をゆがんだ表情と背景の炎の造形で表現した。

一方で上人は表情を抑えて、静かに見守り論ずる姿にし智行と対比的に表した。

4) 白百合の美しさと智行の心の浄化



漆黒の闇と静寂の中で月明かりにきらきら輝く水面を背景に、ひとり立ち尽くす智行の姿を背景に表現した。

穢れを知らぬ純白の輝きに心を打たれ涙を流し

続ける姿を手前に表現した。

(3) 掲示資料による援助の効果

授業を行った川上氏からは援助の効果として以下のような報告を受けた。

1) 物語の内容を短時間で掴む効果

当初の目標である「掲示資料による物語理解の援助」については、話の流れのポイントとなる場面を絵で示す事で、短時間で内容を伝えることができたとの事だった。

2) 発問を考えるヒントになる効果

「登場人物がどう思ったか?」「登場人物の行動はなぜか?」「もし自分なら?」という発問の際に、掲示資料を見る事で想像しやすい様だったとの事だった。絵で示された場面は、生徒が状況を読み取り、場面を想像するヒントとして効果的だったとの事だった。

3. まとめ

(1) 絵画制作としてのパステルの可能性

美術としての絵画制作では1枚の作品に数十時間掛けるのは通例で、短時間の制作でも数時間かかるのが常識だ。今回、数枚の絵を短時間で制作する必要がありパステルを用いたが、その可能性の大きさに驚いた。絵の具であれば手間のかかる彩色のグラデーションが簡単に作れ、乾燥時間も必要なく、思いのままに制作を進められる点が大変優秀だった。定着性が弱く保存性が低いため本格的な絵画制作では敬遠されがちだが、一過性の制作物においては非常に有効だ。

(2) 掲示資料としての絵画の可能性

今回の試行を通して、道徳教育における掲示資料としての絵画の可能性を確認できた。

文章表現では読み取りに時間がかかる内容も絵で示すと直感的に短時間で読み取ることができたのは当初の想定通りだった。

ノンバーバル言語としての造形言語は、話し方や表情、しぐさなどと同様に、言葉にならない未分化なものをありのままに示す事ができるという特色を持つ。例えば、登場人物の割り切れない感情などを示し、か

つ、その内面を見る人に想像させる余白が大きい言語である。この解釈の余地が大きいという点は、ひとりひとりが内心に答えを求める道徳教育において非常に重要な点であり、大きな可能性といえるだろう。

註

- 1) 「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」平成27年7月 文部科学省